

古代史散策

No. 010

山辺の道南部②

パナソニック電気松寿会
古代史散策部

昭和54年 6月作成
平成 8年 5月復刻
平成15年 9月 3刻
平成29年10月パソコン版作成

《 コース 》 7 km

近鉄桜井駅－ JR巻向駅 － 野見宿禰神社 － 大兵主神社
－ ¹²景行天皇纏向日代宮跡・¹¹垂仁天皇纏向珠城宮跡 －
珠城山古墳 － 景行天皇山辺道上陵 － ¹⁰崇神天皇山辺勾岡
上陵 － 櫛山古墳 － 長岳寺 － 中山大塚 －
手白香皇后衾田陵 － 成願寺バス停 …解散 JR長柄駅

《 総 説 》

【纏向・穴師の里】

纏向およびその中心の地穴師^{あなし}は、山辺の道南部のほぼ中央
に位置し、大和朝の大王の権威がほぼ日本全土に及んだ、と
思われる¹⁰崇神、¹¹垂仁、¹²景行3代の中心の地であった。

穴師の里の東には秀麗な巻向山^{まきむくやま}(565m)。その南山裾は三
輪山(476m)と重なる。巻向山の景色と新婚の喜びを二重に
重ねた柿本人麻呂の秀歌

三毛侶^{みもしろ} (三輪山) の その山並みに 児等が手を
巻向山は 継ぎしよろしも 万葉集 巻7#1093

巻向山の左右は、竜王山(585m)と弓月ヶ岳(齋槻岳)^{ゆづき}(567
m)が並び、あたかも大鳥がその羽根を拡げているかのよう
に見える。即ち人麻呂の云う“羽易^{はがひ}の山”である。竜王山は

人麻呂歌の“引出の山”なのであろう。

人麻呂が妻の死に出会ったときの沈鬱な挽歌

打^{うつせみ}蟬と 念^{おも}ひし時に 取持ちて 我が二人見し 趨^{けしり}出
の 堤に立てる 榎の木の ちちごちの枝の 春の葉の
茂きが如く 思へりし 妹^{いも}にはあれど……中略……大鳥
の 羽易の山に 我が恋ふる 妹^{いま}は座すと 人の言えば
……………後略 万葉集 卷 2#210

反 歌

去年^{こぞ}見てし 秋の月夜は 照らせども
相見し妹は いや年さかる 万葉集 卷 2#211

衾^{ふすまじ}道を 引出の山に 妹^{いも}を置きて
山路を行けば 生けりともなし 万葉集 卷 2#212

今、竜王山麓の前山の柿の木林中に、衾^{ふすまだ}田陵がひっそりと静まり、山腹の蜜柑畑には累々として群集墓が残っている。引出の山は古代葬送の地であったのである。そこに人麻呂の妻も葬られたのだ。

なお纏向、穴師を語るときは、人麻呂の人生行路を察せられる13首の巻向歌を忘れることはできない。

児等が手を 巻向山に 春去れば
木の葉しのぎて 霞たなびく 万葉集 卷 10#1815

玉かぎる 夕去りくれば 獵人^{きつひと}の
弓月ヶ岳に 霞たなびく 万葉集 卷 10#1816

人麻呂の習作歌であらう。

鳴る神の 音のみ聞きし 巻向の
桧原の山を 今日見つるかも 万葉集 卷 7#1092

新妻の歌であらう。結婚前に人麻呂から、巻向の話や度々聞かされていた新妻の感懐の歌と思われる。

纏向の 穴師の川ゆ 往く水の
絶ゆることなく またかへり見む 万葉集 卷 7#1100

纏向の 桧原に立てる 春霞
おぼにし思わば なづみ来めやも 万葉集 卷 7#1813

前出の巻7 # 1 0 9 3 と共に、人麻呂の新婚の妻への熱愛ぶりがうかがえる歌だ。

所が、突如として新妻はこの世を去った。人麻呂の歌調は一変して悲愴感にあふれ、使う文字まで変えるのである。

児等が手を 巻向山は つねにあれど
過ぎにし人に 行き巻かめやも 万葉集 卷 7#1268

纏向の 山辺とよみて 往く水の
水沫^{みなわ}のごとし 世の人吾等は 万葉集 卷 7#1269

痛足^{あなしがわ}河 河浪立ちぬ 巻向の
由槻^{ゆつき}が嶽に 雲居たてるらし 万葉集 卷 7#1087

黒玉の 夜去り来れば 巻向の
川音^{かわと}高しも 荒足^{あらし}(嵐) かも疾^とき 万葉集 卷 7#1101

(以下の巻向歌は略す)

新妻に先立たれた人麻呂の心の痛手、そしてこれを契機としてその詩境はさらに深まる。

《 各 説 》

【野見宿禰神社】

桜井市穴師

日本書紀 垂仁紀 7年：群臣、大王に奏上し「当麻邑の人
当麻蹶速は、力強く、角を欠き、^{たまぎのけはや つの} 鈎を申ぶ。恒に豪語し『強
力者に遇い、死生を期せず力くらべせん』と云う」と申し上
ぐ。天皇 ^{ながおち} 長尾市を出雲へ遣わし野見宿禰（天穗日命の
14世の孫とある）を喚す。野見宿禰、出雲より至り相撲取ら
しむ。各々足を挙げて相蹶む（四股 ^ふ 踏みの原形）即ち当麻蹶
速のあばら骨を蹶みくたく。またその腰を踏み折きて殺しつ
……

とあり、それがこの所と伝承する。

広場の土俵跡は、昭和 37 年、当時相撲協会の理事長であつた時津風親方（元横綱双葉山）が齋主となり、幕内の全力士・行司が参拝のとき、大鵬・柏戸両横綱が土俵入りを奉納した跡である。

広場に桜樹数十本、春深き頃山の辺の道に色を添える。

【式内穴師坐兵主神社】

桜井市穴師

奈良朝時代、既に文献（大和国正税帳 天平 2 (730)）に現れる古社。現在の兵主神社は穴師社の下社の趾であり、一つの覆屋の中に弓月ヶ岳山上の上社（名神大社穴師兵主神社）を中心に、若御魂神社（元卷向山桧原にあったと云う）大兵主神社（元の下社）の三坐を合祀し、総称して穴師坐兵主神

社と称する。兵主神は諸説粉々でよく判らない。

【12 景行天皇纏向日代宮・11 垂仁天皇纏向珠城宮】

桜井市穴師

穴師兵主社を西へ下る坂道の途中の地は、両天皇の宮居の跡と伝える。そうであるなら、日本武尊もこの地から西の熊襲討伐に、また東国平定の軍旅に発たれ、垂仁帝の命を受けた田道間守が、南国から「非時の香の木の実（蜜柑）」を持ち帰ったのも亦この地であった。

初夏 5 月、穴師蜜柑の白い花がかぐわしい香りを漂わし、土地っ子は“我国蜜柑栽培の元祖”と、誇り高げに語りかけるのである。

【 珠城山古墳 】

桜井市穴師

珠城山の尾根伝いに東西に並ぶ 3 基の古墳、南側を巻向駅の土取りの為に削り取られて原形を止めぬが、その内の一基は工事中に横穴石室が現れて有名になった。頂上に稲荷社を祀ってあって辛うじて全壊は免れた。

蜜柑畑に覆われた墳丘から埴土器の破片が見当たることと併せると、その築造は 6 世紀古墳の後期のものであろうと思われる。他の 2 基は痕跡を残すのみである。

【景行天皇山 辺道上陵】

天理市柳本町

渋谷向山古墳と呼ばれる全長 310 m、濠をめぐらす前方後円墳。柄鏡型は 4 世紀中頃の築造か。この時代の古墳としては全国第一位、全古墳中 7 位の大きさである。

景行天皇の皇子大碓命は、小碓命（日本武尊）をして殺さしめられ、小碓命は東奔西走して、凱旋されることなく能褒野に薨じ、若帯日子が次代の天皇となられる。

¹³成務天皇である。

この陵の西南隅から眺める晴れた日の景観は見事。

【^{やまのべのみちまがりおかのへ}10崇神天皇山辺道勾岡上陵】 天理市柳本町

^{あんどんやま}行燈山古墳と呼ばれる全長 240 m の前方後円墳。4 世紀型で、高堤をめぐらせ 2 段に築いた周濠の築造技術は見事。この濠は元治元年(1864)、時の 12 代柳本藩主織田信成が、極度の財政難を押して修復した。四つの陪塚も前方後円墳である。

バス道を隔てた式内伊射奈岐神社は、菅原道真を合祀して柳本天神又は天満宮と称したが、明治維新の際、現在名に復した。

その南に天神山古墳あり。全長 113 m の前方後円墳で西半部は古く破壊され、東半部も県道改良工事により崩すこととなり、橿原考古学研究所の事前調査の結果、竪穴石室遺存し、朱 41kg、鏡 23 面（その大部分が中国よりの渡来の舶載鏡）直刀 4 本、その他鉄製品が埋蔵されていたが、人体の埋葬はなく、崇神陵の陪塚の一つとみなされる。

崇神天皇の治世は、天皇の叔父武埴安彦（その妻吾田媛。香具山の土を密かに取る説話は古事記にはない）の皇位継承の為の反乱や、大和国の祭祀権即ち政権の出雲系部族との主導権争いに後退を余儀なくする等、大和朝廷の政権の危機を思わせ

る伝承を残しているが、この危機を乗り越えて四道（東海、北陸、山陰、山陽）に將軍を派して版図を拡げた説話は、大和朝廷が大和盆地の小範囲国から大きく、ほぼ日本全土をその統治下に納めたことを示し、記紀に云う「肇国御らす天皇」の和風諡号を贈られた所以であると思われる。

【 櫛山古墳 】 天理市柳本町

全長 150 m 双方中円の特異な形の古墳として著名。中円部の直径 90m 高さ 11m、前方部（西側）の中 60m 高さ 9 m、後方部の中 75m 高さ 11m。崇神陵の後方、俗にニサンザイ山の尾根続きに主軸をほぼ西北西—東南東にして横たわる。西側の地藏池は周濠の名残りであろう。三段積みの段上、ずり落ちた葺石の間に埴輪の破片も散乱する。そして後方部の段には、目もあやに白色の小石もまじり、後方部の頂が祭壇であったのであろう。果たして、その頂の平坦部 3 m 平方に深さ 60cm~90cm の小石敷が残っている。中円部頂にある長さ 7.1m 巾 1.4m の竪型石室は、天井石は失われ、側壁も半ば崩れている。石室内には、組合せの長持型石棺が置かれていたと思われる。昭和 24 年の調査で、石室内に鉄鍬（やじり）や石釧（腕輪）、車輪石などの石製装身具、鍬形石などが出土した。

【 長岳寺 】 天理市柳本町

天長元年(824) 淳和天皇勅願、空海開基。大和神社はこの地に鎮座していたと云い、その神宮寺だと云う。庫裏、延命殿、鐘樓門及び本堂の 5 仏はいずれも重文。墓地と奥の院に通ずる道には、鎌倉時代(1198~1333) 南北朝時代(1333~1392) 頃の石仏が並んでいる。

